

伊豆大島の産業

— 観光業の発達に伴う島内 地域分化を中心にして —

野崎美佐子

伊豆大島は「三原山と椿とアンコ」で知られる非常にポピュラーな我国の観光地の一つである。人口一万あまりのこの島で現在の主産業は観光業であり、他にキヌサヤエンドウ、花卉栽培を主とする農業と、僅かに沿岸漁業が営まれている。集落は海岸近くに自然発生的に成立した岡田、元町、泉津、野増、差木地と19世紀になって開かれた波浮港の6部落で、ほぼ等間隔に点在し、各部落の景観には異質なものが観察される。そして、これらの部落間には歴史的な機能分化があり、近年、観光業が発達するに及んで、その分化は著しくなってきた。筆者は大島の産業史の中に現在の観光業を位置づけ、その現状分析を試みることにより、今後の動向を探り、島民の「死活の問題としての産業」から「より有効な産業」の開発の一視点を予見すべく考察を試みたが、その結果は次の如くである。

- 1) 地理的位置の有利性から、ときの権力により浦方と区別され、保護された岡田、新島（元町）両村は後にも観光船の出航港として経済的優越性を保持してきた。
- 2) 逆に釜方と指定され、生産物の流通には関与できず浦方部落の流通面における中間搾取をうけてきた野増、差木地、泉津の各部落は後世も比較的不利な状態であったが、観光業の発達に伴い、それぞれに変化した。
- 3) 野増は、元町と距離的に近く、その経済圏に含まれてしまい、元町の衛星部落として、観光関連家内工業が多い。
- 4) 泉津は、大島公園や、温泉開発、キャンプ場設置などの観光施設開発が急速に行われ、観光地域となった。
- 5) 差木地は、南大島という位置上、より温暖であり南向斜面を利用しての冬季のキヌサヤエンドウや花卉栽培により農業地域を形成し、安定してきた。又、夏季には、海水浴客を対象に民宿を営営して現金収入を得ることも、ここ1・2年の傾向である。
- 6) このような地域分化は当然のことながら地域格差をもたらし、島の方向としては、この格差是正を計っているが、その為には、歴史的に現在の地域分化を認めたいうえて、分化を乞願した全島的な開発が望ましいと思われる。
- 7) 現在の島の主産業である観光業は、近年、成長経済の影響により、とみに大衆化し、若年化した観光客を対象とすることで、その性格を変えてきた。又、交通機関の発達に伴い観光地としての価値変化や、他の観光地との競合も生じ、大島観光の独自性をうちださねばならず、その意味において大島観光業は一つの曲り角に来ているといえよう。